

慎一の青春、其の一

内田博司

登場人物

吉村慎一 十九才
鮫島桐子 二十八才

時

昭和三十三年～昭和三十五年

所

名古屋市 昭和三十三年
奈良県 昭和三十五年

プロローグ

この物語は日本の敗戦後五年から始まります。国民の大多数がまだお米を満足に食べられなかった頃の話です。貧しい家庭の子供達や大人が結核という亡国病に罹り全国に患者が溢れ、至る処待機患者が急増する騒ぎとなりました。丁度コロナが今世界で百八十万人の死者（令和三年一月一日現在）を出して更に拡大している現在と同じく、当時日本だけで百五十万人の死者を出した結核に対して厚生省は急遽生活保護受給患者を対象に成功率が五割という外科手術を選択させて待機患者の解消を図ったのです。主人公の吉村慎一も医療保護で千葉県の療養所にいたので当然外科手術を迫られました。受けなければ自宅に返され父親は薬代を稼ぐ為に再び徹夜作業をしなければならず、と言って手術では到底生きて帰る自信はなかった。帰宅も出来ず手術も拒絶する慎一は遂に進退窮まりました。だが選択には半年の猶予が与えられ切羽詰まった慎一は当時母親の元へ足繁く通って入信を勧める新興宗教の定婆さんを思い出し定婆さんに入信を願ひ出たのです。定婆さんは所属本部へ事情を話し許可を得て其の返事をくれました。こうして慎一は昭和三十三年十月虎口を脱し慰安の為の映画「翼よ、あれがパリの灯だ」を上映している夜に紛れて療養所を脱走しました。行く先は名古屋でした。

一

名古屋へは明け方着いた。駅は広く国鉄の他私鉄など色とりどりの電車が止まっていた。改札を出て定さんが送ってくれた支部教会への地図を取り出し構内を抜け東山動物園行きバスに乗った。出発する頃には出勤する人達で車内は一杯になった。途中の繁華街で人が何度も降り降りした。巨大な都市も終点ではさすがに慎一人一人になった。市営墓地に沿って何処までも歩いて行くとやがて右手に大きな看板があった。「天道教千種大教会名古屋支部」と書いてあり坂道を登ってゆくと大きな玄関があった。

「東京の定さんに紹介されて来ました」

受付の若い信徒はビックリして奥へ引っ込んだ。広い畳敷きの隅に待っていると大分年を経たお婆さんが出てきてジット慎一を見ていたが

「あんたの病気は贅沢病や、旨いものばかり食べてからにちっとも働かんと何もせんで息してるだけや、そんなもんにかかる人間は根性の腐ってる証拠やぞ、そんな人は人様の最低の仕事から始めるもんや、まず朝四時に起きて便所掃除しいや、そいたら文句を言わんと真面目に働けばきつとようなる、今日から励みなさい、ええか」

それだけ言うと言ってしまった。奥の方に神殿と左右に格式のある社が並び神楽の道具が置かれていた。やがて当主の娘さんらしい年配の人が現れた。

「あんたよう来らしたね、定さんが心配しとったであとで手紙でも出しときなさい」

慎一は「はい」と返事をし頭を下げた。

「さっきの人は私のお母さんで教会長の奥さんなんやで、毎日のことは私が担当だで、何でも相談しなさい」

と奥へ引っ込んだ。代わりに事務担当が現れて本殿の裏へ案内した。八畳の畳敷きに押し入れがあり壁際に十個程のロッカーが並んでいた。

「布団は押し入れでロッカーは空いているとこ使って。これから君の仕事場へ行くで」

渡り廊下を通って長い洗面所の奥に十五基の便所と男子小用のトイレ棟があった。枯れ葉が舞い風がふき抜ける木造の建屋だった。これが慎一の最初の仕事場だった。

殺風景な眺めだった。療養所と余りにも違った風景に身震いがした。それでも行く宛てもなかった自分に此処が新しい身の置き所だと思おうと思わず定さんの親切が身にしみて嬉しかった。

夕方になって神殿に信徒一同が集められた。教務担当が慎一を皆なに紹介した。慎一は頭を下げて「よろしくお願ひします」と挨拶した。

その日から慎一は修養課の学生となった。修養課は三十才の緒方さんを始め二十六才の加藤さん、二十二才の宗方さんと慎一だった。年の差もありそれぞれ事情を抱えて此処へ引き寄せられた人達の暗黙の了解は不干渉だった。一切の出生、門地、経歴については聞かせず、ガルーラであることが一緒に寝起きする内に分かった。それ以外は明るく親切で協同作業にも障害はなく円滑に生活が進んでいった。

しかし朝四時はさすがに辛かった。仲間を起こさないように静かに部屋を出て便所に向かった。異様な静けさだった。箒で掃いた後雑巾掛けだが踏み板に荒目の鉋掛けしかしてないので雑巾が板目に引っかかり滑るようには雑巾が走らなかつた。つい絞りをゆるめて拭くと水がビッシヨリ残って気持ち悪くもう一度拭き直さなければならなかつた。一番困ったのは汲み取り式なので板の下は文字通りの便壺だった。そこから這い上ってくる風がヒヤリとして首筋に纏わり付くのが気持ち悪かつた。それが十五基もあるので時間がかかる上に踏み板に粗相もあるので別の雑巾を用意しないと清掃にはならなかつた。思わずこんな仕事と腹立たしくなり舌打ちしてしまつた。しかし次の瞬間こうしてられるの

も定婆さんの御陰と思うとあわててそんな気持ち打ち消した。

七時になると勤行が始まった。壁際に積み重ねられた経典を各人が取りに行き教務担当の読経に続いて皆な声を上げて経を読んだ。この時は気持ち一つになるので気分が高揚して気持ちよかった。

七時半に食事が始まった。全員アルミ食器だった。飯粒よりサイコロ状のサツマイモばかりが目立ち味噌汁は大根の葉っぱだった。オカズはオカラと漬物は大根だったので慎一は味噌汁を御飯に混ぜてかき込んだ。教会長の奥さんは慎一のことを「旨いものばかり食べて」と言ったが此処も東京と変わりなかった。

慎一一人が学生服なので緒方さんがロッカーから作業服を引っ張り出してきて「これに着替えや」と渡してくれた。長靴を履いて後についてゆくと神殿の裏は見上げるような山だった。その山を崩して谷底を平らにするのが修養課の仕事だった。この山を均すなんて何年かかるかと思うと目眩いがした。

慎一は本当に生きて帰れるだろうかと恐怖を感じたが、これが自分の行き着いた道ならばと観念した。病気のことには話してないので簡単に死ぬわけにはいかない。慎一は怠けていると思われない程度の歩調で動作だけは休まずに作業に取り組んだ。喉が渇くとヤカンから水を飲み猫車という車輪が一つの台車に土を入れては谷へ投げ込む単純な動作の繰り返しを一日中続けた。働いている間はとても辛いので何度も「休ませて」と訴えたかったが言葉を呑み込んだ。耐えている内にリズムが生まれ何故だか満たされた気分になってきた。それは不思議な感覚であった。

労働は激しい疲労で猛烈な空腹に襲われた。肉が欲しかったが出されたものは野菜と漬物でたまに魚が出てくると夢中で食べた。疲れているので食後の読経と経典講義は眠くて仕方が無かった。夜は九時に寝たが朝はキッチンと目が覚め便所掃除も要領を覚えて生活のリズムが出てくるといつしか病気のことには気にならなくなっていた。栄養が本当に足りないと思う時は療養所の安藤さんがくれた栄養剤をのんだ。ただ栄養剤は大事なので母親に少しばかり金の無心をした。暫くして母親から現金書留が届いた。慎一は緒方さんから聞いた近くの乾物屋へ行き鯨のベーコンとニンニクを買いカミソリでニンニクを細かく切ると嚙まずに呑み込んだ。たちまち体内が熱くなり元気が出た。そうやって病気には細心の注意を払っているためか体調は悪くなかった。しかし決して油断は出来ないで毎日脈拍を測ったり昼休みも安静にして体調維持に努めた。

二

仰天の名古屋生活もどうか慣れた頃初めて父親に手紙を書いた。定さんの御陰で新しい生活にも慣れ病気も大過なく元気で暮らしています。どうか心配なくそちらも身体に気をつけて下さい、と書いた。

毎日挑んでいる山は一向に削れた気がしないが谷には少しずつ土が盛り上がって来てそれを均すときに達成感が湧き仕事の励みとなった。

一ヶ月経った頃若奥様から

「便所はキレイになったね」

「有難うございます」

「言われたことは全てが修行なんだから黙って励みなさい」

「はい」

「今日から便所の他に風呂番もやってみなさい」

といわれた。神殿の横の教会長宅に直結して大きな風呂場があった。重油式のボイラーで炊くのだが布教師が操作を担当していたが引き継ぐことになった。土木作業を四時で切り上げると風呂場に来て油量を確認しボイラーに点火し自動の温度調節を監視する仕事だった。止めるのは九時で就寝時間になるがその作業を終えてから寝ることになった。そのかわり重労働の一時間切り上げが許されたのでそれが何より嬉しかった。操作室でボイラーの操作を自動式に切り替えておけば後は機械が監視をしてくれ異常があれば警報で知らせてくれる。この部屋は教会長宅につながっていて若奥様から弟の部屋の本は自由に見て良いと許可が出ているので弟さんの部屋に入った。弟さんは大学生で本棚に本がズラリと並んでいた。慎一はそこから岩波書店の「芭蕉文集」を取り出すと操作室に戻り熱量を監視しながら読み耽った。野ざらし紀行を読んで芭蕉の心が慎一の心に滲み込んだ。誰も知らない名古屋の天道教の風呂場でこうしている自分にしみじみと寂しさが湧いてきた。

そして冬が来た。教会の正月は慎一にも人並みに素晴らしい経験を与えてくれた。着飾った信徒さんが朝から引きも切らずやって来ては参詣を済ませると神殿前の広場に慎一達が昨夜から構築したテントの畳に座ってお雑煮を食べると嬉しそうに帰って行った。大晦日に修養生と炊事班が代わる代わる餅をつき北海道の昆布と高知の鯉節と煮干しで出汁を作りテントの横に一列に並んで炭火で顔中真っ赤にしなが餅を焼いた。隙を見つけてはその雑煮を食べた。こんな旨い雑煮を慎一は食べたことが無かった。名古屋の大きな自動車会社が毎年寄付してくれる進物だった。

しかし二月になると朝の便所掃除は辛かった。雑巾が凍って水道も出ない日があった。その時は風呂場から残り湯を汲んで作業をした。朝食が終わって山崩しの作業の前に若奥様に呼ばれた。

「どうだね、この生活にも馴れたでしょう」

「はい」

「今度は奈良の専修科に行ってきたさい、全国から人が集まるので揉まれてくるとええが」

「えっ、すぐですか」

「すぐに決まっとるがや」

「はあ」

「人はなあ面と向き合ったら互いに挨拶するのは当たり前やで」

「はい」

「だけんだな本当に偉い人間に会ったら通り過ぎた後ろ姿に頭がさがるんやで」

「はあ」

「そうゆう人に会ってこやあ」

「はい」

「信仰は心だで、また心が定まればまたその先があるがや」

慎一は若奥様の顔を眩しそうに仰いで「はい」と言った。慎一に何故かしら大きな期待が膨らんだ。是まではその日、その日を生きるのが精一杯だった。しかしこの一年を振り返ると自分でも分らない大きなものに動かされているような気がしてならなかった。その大きなものが何なのか慎一には分からなかったが、その風に吹かれていつの間にか病気を忘れていることに気がついた。あれ程「死」を恐れて翻弄されていたのに今ははつきり自分という存在を自覚して考える日が多くなった。

急に千葉の看護婦安藤静子が頭に浮かんだ。栄養剤をくれた上東京駅まで送ってくれた時を思うだけで胸が熱くなつたがようやく身体を動かせる今ではそれ以上に焦がれる程胸が締め付けられた。一緒に歩いた道や映画を見た時の一コマ、一コマが想いだされて来るのであった。護国神社のお守りもバッグに仕舞ってある。慌ただししい東京駅での別れから慎一は今再び名古屋を離れようとしていた。

寒気がひとしお深まった二月末、慎一は奈良に向かう車中にいた。山科を過ぎ鴨川を渡ると京都である。修学旅行で来た以来だがすぐ奈良線に乗り換え午後丹波市に着いた。

市全体が宗教都市だった。藍色の法被を着た信徒が大勢行き来していた。軒を接する店も法具、祭具を並べていた。やがて長い塀に囲まれた広大な門を潜ると重厚な瓦屋根の館が建っていた。玄関で入学証を渡した。係員が長い廊下を先導して六畳ほどの部屋に案内された。それが専修科の寮だった。そんな部屋が遙か向こうまで続いていた。部屋には四つの机があつた。畳に座り、机に手を置いてみた。ヒヤリとした感触が伝わってきた。

百人は入れる食堂で互いを知る間もなく食事を摂った。その後大広間で就学の説明があり相部屋に戻ると二十代そこそこの三人が集まった。大阪と岡山県と東京の慎一だった。それぞれの出身地で同じような経験をしている者達だった。

翌朝、法被姿になった一同は二十人ずつ隊列を組んで教育学館に向かった。学校と変わらぬ風景だった。三十人ずつに分かれて教室に入った。机の上に五、六冊の本が置かれていた。本をめくったりしていると法衣を着た教官が入ってきて教壇の前に立つと大きな声を張り上げた。

「信仰は教義と実践を通して神の真義に触れることで生きる指針とすることです」

慎一は静かに聞き入った。

窓に朝の光が射してきた。

三

翌日からは毎日弁当を持って隊列を組み街中の教育学館へ向かうと商店や民家の人々が気さくに挨拶してくれた。こうした日常が慎一には当たり前のように溶け込んできた。

こんな暮らしが療養所にいた時より徐々に病気への不安を薄れさせ一日を快活な気分でも過ごせるようになった。この驚くべき変化に自信が湧いてきた。

ただ身体の不安が薄れてくると同時に是を一生の仕事に出来るのか、本当に自分はこの教えに帰依しているのか、と言うことが今ひとつ信じられないでいる自分の存在に気づき始めてきた。

金曜日は実践道場の日だった。今は田植えの真つ盛りだった。慎一は米作部門担当の指

示で苗を持っては田に入り一株ずつ苗を植える作業に従事した。ひと畝植えるだけで汗まみれになったが気持ちよかった。身体一杯に生きる喜びが漲ってきた。こんな生活もいいなあとしみじみ思った。

休憩時間になった。

畦道に腰を掛けて休んでいると目の前の道を頭陀袋を提げた托鉢の僧侶が通りかかった。慎一は思わずその様子を眺めていた。

僧侶は大きな農家の入り口を覗いた。誰も出てこない。横から箆を腰にのせてその家の家人が出てくると

「昼日中百姓の家覗いたって誰も出てくるもんはおらんで、皆な働いているんやから」

慎一にもその声は聞こえた。托鉢の僧侶はしきりに恐縮しているふうに見えた。家人は脇から小さな袋を突き出して

「これ少しやけど持っていき、小豆やけどアンコにして食べたらいいで」

「有難うございます」

僧侶が答えた。

「そうやって一人で歩いてんのも疲れるやろ、箆の上で寝ていたらどや」

「いや、とんでもないです」

「怒られるのか、そんなこと疲れたら休んだらええのや」

「玄関先ですみませんけど一寸食事させて貰えませんか」

「飯まだやったん、ほなお茶入れたげる」

と奥へ入ってゆく。僧侶は座ると頭陀袋に小豆を入れ、竹皮に包まれたおむすびを取り出し口に入れた。僧侶はお腹が減っていたのかもぐもぐ食べた。

家人が盆にお茶と漬物を載せて出てきた。

「ほな、お茶のんでお天道様に感謝して御飯食べや」

「有難うございます」

家人は空を仰ぎ

「ええ天気だこと、有り難いこつてすなあ」

そう言うとお奥へ消えた。

慎一はずっと見ていて僧侶が食べ終わった頃を見計らって声を掛けた。

「ご苦労様です」

三十過ぎの僧侶はフト見て天道教の人と分かると

「これは奇遇ですな」

慎一は興味を持って尋ねた。

「何故ですか」

「私は一瞬前迄あなたを知らなかった。それなのに今こうしてあなたと話をしている」「そうですね」

「これが縁です。三経義疏に曰く、会い得ずして既に会うことを得たり、私とあなたは今縁をもって結ばれたのです。その先どうなるかはわかりません。ただ私達は仏の縁をもつて会う筈もないのに会えたと言うことです。お大事に」

僧侶はそう言うのと立ち去った。慎一は何が起こったのか掴めずに僧侶の後を目で追っていた。僧侶は一体何を言いたかったのだろうか。

四

慎一は丹波市の街が好きになった。ここにいるといさかいというものを見たことが無かった。自分の両親は毎日暮らしのことで喧嘩が絶えなかった。そのことが慎一にはとても辛かった。生きていることが何故楽しみにならないのか。慎一はここにいる御陰で悦びすら感じていた。こうして一生暮らせるならこれ程幸せな人生はないと思った。

日曜日になった。慎一は食堂でひとり朝食を食べた。同室の二人は既に出かけていた。大阪出身の木村太一さんは家業が燃料、氷室業だが石油の進出で採算が取れず日曜日毎に帰宅しては家族で将来の相談をしていた。もう一人の近藤敏夫さんは岡山出身で慎一より二才年上だが姉と共に美容院を経営する母に勧められ美容学校に通っているが休学して此処に籍を置いている。理由は美容師でいいのか離婚した父親と相談したいらしい。皆なそれぞれ事情を抱えて生きているのだ。

慎一はこの間会った僧侶に謎のような言葉をかけられて別れたことが気になっていた。正に禅問答をかけられたままなので会いに行こうと思った。宗教の道は違うがあの人と言った「縁」についても少し聞いてみたかった。道順はその時聞いて漠然と想像がついていた。今歩くことがとても気持ちよかった。街は道路一本外れるとそこには水田や農地が広がっていた。田には光を受けて稲が勢いよく育っており蛙が泳いでいた。のどかな風景は慎一の心を弾ませた。目指す寺は深閑としていて参道を進むと頭に手拭いを巻きザルを傍らに置いて雑草を摘んでいるこの間の僧侶を見つけた。挨拶をするのにこやかに作業を止めて「又会いましたねえ」と言った。

慎一がこの間の続きを聞きに来ました、と言うとザルを持ち庫裏の入り口で手を洗うと傍らの縁台に腰を下ろした。慎一も並んで座ると

「生も一時のくらいなり、死も一時のくらいなり、たとえば冬と春とのごとし」

僧侶は経で鍛えた喉で鮮やかに口唱した。慎一が感心していると

「もし生命というものがあるならばこの現実の世界においてこそ一瞬、一瞬を充分に生きることに、それが今ですよと教えている」

それだけ言うとは僧侶はニコニコして慎一を見つめた。そして

「君は今迷っているのじゃないか」

そう言われて慎一はドキッとした。何故か心の底を見透かされた気がした。

「まあいい、決めるのは君だ」

言葉を継がないでいると僧侶は

「停留より飛翔、又会おう」

といって庫裏の中に消えた。慎一は頭を下げるとゆっくりと寺を後にした。

「生も一時のくらいなり」と心の中で繰り返した。

夕暮れの田園風景は甘やかな風が鼻をくすぐった。

慎一は次の日からおだやかに授業についていった。頭が一杯になると次の休みには電車に乗って奈良に行った。

奈良はもつと好きになった。志賀直哉の家とか、小林秀雄の泊まった宿屋、特に好きなのは興福寺の北円堂だった。そこには運慶の彫った無著、世親像がありこの二像を見ていると人間の悲しみを乗り越えた諦観がジワジワと寄せてきてそっと包まれる感じがするのであった。この揺るぎの無い静けさが慎一にはたまらなく魅力的だった。街がこれ程に深く慎一を引き込んでくれるのに実は慎一の心は揺れていた。

五

慎一は僧侶の言葉がよく理解出来ないことに悶々として日を送った。早朝参拝には誰よりも早く出かけて無心になつて読経を続けた。朝の行列登校もそして授業も姿勢を正して臨んだが心中は揺れ動いていた。今日の一時間目から「天道史」だった。名古屋時代から何度も読み継いできた教科書だった。頭にこびりつく程覚えていた。

急に不埒な考えがよぎった。同じことを学ぶのは時間の無駄だと思った。それより新しい冒険がしたかった。フト決められていることに逆らいたくなつた。手提げを持つと教室を出た。そのまま学校を後にした。商店街を抜けて気がついていたら丹波市駅に来ていた。躊躇することなく帯解駅までの往復切符を買った。ホームを歩いて停まっている電車に乗った。急いで法被を脱ぐと手提げにしまった。

遠くで蒸気機関車に給水しているのか排気管から勢いよく蒸気を吹き出していた。慎一

は自分の心の裡と同じだと思った。蒸気は風に吹かれて空に消えていった。そのうち電車が動き出した。走り去る風景を見ているとすぐ帯解に着いてしまった。こんなに早く着くとは思わなかったのに、ぐずぐずしている間に電車は動きだしてしまった。もう引き返せないうと思った。奈良に着くといっそもっと遠くまで行きたいと思い、とうとう京都迄乗ってしまった。

京都駅に着いた。慎一はホームに降りた。修学旅行で金閣寺へ行ったことがまざまざと蘇った。あの時考えたことがそのまま未解決だったことを思いだした。大きな池の畔に二層と三層が全て金箔で張られた足利義満の居宅であり政務の拠点が陽を受けて燦然と輝いていた。足利とはどんな時代だったのか空想の翼がどんどん広がっていった。やがて応仁の乱が長く続いて世の中は乱れるのだが其の時代の終わりにはどんな文化が遺されたのか知りたかった。慎一は構内の案内所を訪ね理由を話した。職員は何冊も資料を調べて答えてくれた。それが竜安寺だった。竜安寺。慎一は行ってみたいと思った。慎一は市内の観光案内を貰い交通経路を聞いた。

市電が走っている通りまで来て始めて駅を背にして前方の広い通りを眺めた。ガイドブックを取り出すと教えられた京福電鉄四条大宮があった。慎一は長い西本願寺の堀沿いを四条を目指して歩いた。

四条大宮駅から帷子ノ辻で乗り換えて北野線を竜安寺道で降りた。竜安寺は鬱蒼と立ち並ぶ樹林の奥にあった。厚い油堀に囲まれた広い白砂の庭に小さな、あるいは大きな石が点在していた。それだけだった。絢爛とした金閣の時代の十年後に物言わぬ石だけが転がっていた。しかしこの石が雄弁に語りかけてきた。

あの僧侶の身に纏った「一切無一物」の権化が此処にある。十年を超える室町の応仁の乱がもたらした結果だった。慎一は方丈の階に座って石庭と一時間以上対座した。

そして元来た道を帰った。寮の夕飯には間に合った。

慎一は布団に潜って竜安寺の庭と修学旅行の時見た金閣寺とを繰り返し思い描いては時代がもたらす変化について考えた。

慎一は托鉢の僧侶を再び訪ねたいと思った。今慎一の心に芽生えている考えに直接答えてくれるのはあの僧侶以外にはいない。慎一は毎朝列を作って登校しながらそんなことを考えていた。

六

又、金曜日が来た。今日はすくすくと育ち始めている稲田から余分な草を排除する作業だった。根気と努力が求められた。慎一が作業着に着替えていると寮生から「場長が呼んでるよ」と声をかけられた。恐る恐る事務所に入ると服部場長が向かい合う椅子を勧めた。

「勉強は進んでいるかい」

「はあ」

「君は名古屋で既に学んでいるから授業は退屈だろ」

「そんなことはありません」

慎一は内心この間の授業をサボったことを咎められるのではと思った。ところが意外なこ

とを言われた。

「君に一つ挑戦して貰いたいことがあってね」

「ええっ」

「信者の娘さんがね君と同じ病気で長いこと患っているんや」

慎一は更に驚いた。病氣のことは名古屋の協会長家族以外話していなかった。

「はあ」

「そのことを母親が嘆いてられるんだよ」

「そうですか」

「まあ、母親の気持ちをなんとか汲んでやって欲しいんだ」

慎一はやはりサボったことを咎めているのだと直感した。それだけでなくは病氣の事を持ち出す筈はない。その上こんな難問を自分に当てるわけではない。第一その為の時間を事務所に届ければ授業免除してくれるのだから極め付きも甚だしいと思った。しかも報告もいらぬと言われた。それでは嘘でもそう言えば何でも出来るではないか。慎一は試されているのだと考えた。

そこで慎一はその日から「天道史」を一番前に座って真剣に講義を受けた。何も起こらなかった。

三週間経って始めて事務所に届け出てその家へ行った。

その家は商店街の中程にあった。普通の神具店だった。昔ながらの豪華な仏壇の反対側には神式の神棚や神具が所狭しと並んでいた。ガラス戸を開けて慎一は声をかけた。奥さんが出てくると「まあまあ済みませんね、横から奥へ入って下さい」と脇を指さした。言われるまま左隣の商店の間を進むと玄関があった。既に戸は開いていて式台に奥さんが座っていた。

「ようこそ来て下さいました。待っていましたんや」

奥さんはそのまま奥の応接間に案内した。ガラス戸越しに板張りの扉に囲まれた庭が見えた。槓が枝を張って下には灯籠があり池には鯉が泳いでいた。奥さんが茶を入れながら

「お若いのね、もっと老けた方が来ると思ってたんよ」

「はあ」

「それでお体はもうええの」

「お陰様で丈夫にさせて貰いました」

「そうやてね親神様の御陰やね、家の桐子も頼みます」

「僕で良いんでしょうか」

「ええ、黙って口答えもせず辛い仕事を黙々とやり遂げたやて」

「いや、夢中でやって来ただけです」
「それを桐子に伝えて貰いたいの、ほな頼みます」

そのまま二階の桐子さんの部屋へ案内された。階段を上ると小間があり突き当たりがトイレで窓側に台所の一式が並んでいた。更に直接一階を経由しなくても診療が出来るように路の右側から扉をはさんで広めの外階段が付いていると言った。「じゃあ後はお願いな」と奥さんはそのまま内階段を降りて行ってしまった。

慎一は困惑した。どうして良いか分からなかった。服部さんからは「お母さんの気持ちを汲んでやって欲しい」と言われたけどそれを自分出来るのか分からなかった。すると部屋から声がした。

「そこで何してるの、入りなさいよ」

若い声がした。慎一はゆっくりとドアを開けた。
セーターに作務衣の格好をした女性が椅子に座ってジット慎一を見ていた。

「お邪魔します」

慎一が挨拶した。学校に通っている女の子と思っていたのに二十代後半の女性で一瞬たじろいだ。

「服部さんからなんと言われてきたの」

「はい、お母さんの気持ちを汲んでやって欲しいと」

女性は声を出して笑った。

「正直で良いけど少し間が抜けてへん」

「はあ」

「私のことは何て言ってたの」

「病氣して弱ってるからと」

「そお、それであなたに何が出来るん」

「えっ、僕ですか」

「だって、白馬に跨がり助けに来てくれはったんやないの」

「いやあ、そんな積もりじゃないんです」

「ほな、何しにきたん」

「はあ」

「そんなん、あかんやないの」

「そうですか」

「そりやそうやろ、人助けなんやからもっと考えてくれなあかんやないの」

「はあ、失礼しました」

「今度は外階段から直接ブザー鳴らしてきてや」
「はい」

それだけだった。慎一は面食らって飛び出してしまった。人と会っていきなり能力を問われたことも初めてだった。ボクシングのパンチを受けたような衝撃だった。千葉の安藤静子さんは同年配でも看護婦なので優しく接してくれたのに桐子さんは冷静で隙がなかった。慎一は商店街を打ちのめされたように帰路についた。

服部さんに報告することは何もなかった。報告を求められてもいないので当たり前前に隊列を組んで学校に通った。教室についてもずっとこの間の会話を反芻していた。
「それであなたに何が出来るの」

その答を見つけないければならない。その事だけが頭を支配していた。それだけは人に相談せずに自分で答を探さなければいけないと思いつながら寮に帰った。

夕食を終えて部屋に戻ると同室の三人はいつもの定位置に座った。近藤さんは父親とは暮らせないからもう一度母の元で美容師をやるしかないと言いつ、木村さんは家業を廃業してサラリーマンになるしかないと話した。木村さんは慎一を指して「若いお前が一番恵まれているな」とからかわれた。皆、世の荒波に揉まれて此処に辿り着いたのだ。それなのに慎一はまだ自分の進路どころか桐子さんから難詰されて答すら見つけられないでいた。消灯後すぐに二人の寝息が聞こえてきたが慎一は寝付かれなかった。

七

次の金曜日は農場を欠席してしまった。服部さんに報告することは何もしてないのに顔を合わせるのには苦痛だった。当てもなく商店街を歩いているうちに足は鮫島神具店に向かっていた。

慎一は真つ直ぐ歩いて行った。神具店に近づくと店の前を通るのが嫌で右側の階段を忍び足で上がった。インターホンを押すと暫くして「誰？」と声がした。「あの」と言いかけたら間を置かず「入って」と返ってきた。

ドアを開けると「どう？ 答えを持ってきた」といきなり浴びせられた。

「はあ」

「楽しみにしてたの」

「お店にリヤカーが見えたので」

「リヤカー？」

「名古屋にいた時会長の奥さんから働けと言われました」

「それがどうしたん？」

「働くとは傍の人を楽にさせること、それでお嬢さんを」

「お嬢さんは止めて」

「はい、桐子さんをそれで病院の行き帰りに」

「いやや止めてよ、それやったら私が荷物見たいやないの」

「そうすればお店の人が助かると思ってる」

「ほしたら私は厄介者と同じやないの」

「いえ、そんな積もりじゃ」

「まあ本当のことやね、あんたは使用人の苦労を見かねたのやね。立派やわ」
「済みません、出直してきます」

「またも慎一は後も見ずに部屋を飛び出した。桐子さんは驚く程素直だった。」

「慎一にとっては桐子さんを助ける使用人の労力を自分が肩代わりすれば桐子さんが感じている負担が少しでも軽減できると思つての発言だった。」

「最初の挑発的な桐子さんの態度が一変に神妙な表情に変わつていた。この極端な変わりように慎一自身も驚いてしまった。怒つてくれるならむしろ相手の気持ちを理解できるのに慎一は桐子さんの深い悲しみに触れた気がした。」

「ただ一瞬どうして良いか分からなかったのだ。それで飛び出してしまった。その時慎一は始めて桐子さんの顔をシツカリと見た。それまではポンポンと景氣の良い言葉であしらわれるので顔を見る暇もなかったのだ。その顔には哀しみが張りついていていた。」

「慎一の心を激しく動かすものがあつた。この気持ちは一体何だろう。」

「桐子さんは白いうなじにかかるほつれ毛をそつと掻き上げながら長いまつげを伏せてまるで泣いているようだった。慎一はその様子をほつきりと目にとめた。」

「慎一はグルグル商店街を歩き続けた。気持ちの整理が付かなかつた。今迄は農場の服部さんに命じられるままに動いていたに過ぎなかつた。ただ「お母さんの気持ちを汲んで病氣の娘さんを元気づけて」と言われて素直に訪ねて来ただけに今は完全に違つていた。あんな慎一の軽い応答に一変に表情を曇らせる桐子さんのナイーブな心の変化に事実戸惑つていた。これは初めての経験だった。千葉の安藤静子さんの時は二人とも澁刺として気持ちも弾んでいりばかりだった。それが今は相手の心の暗い影に触れて自分の感情が揺れ動いた。その衝撃を与えたのが慎一であつたことがなおさらこたえていた。慎一は動揺を抱えたまま学校のスケジュールに従ふことで気を紛らわせた。」

「だが頭の中は桐子さんのことで一杯だった。」

「数日後夕食を済ませるとジツトしていられなくなつて農場へ行つた。服部さんを訪ねると家人が牛舎にいと教えてくれた。服部さんは奥の囲いにカンテラをかざして注意深く牛を観察していた。慎一が近づくと」

「こんな時間にどうしたんだい」

「はい、神具店のことで一寸」

「桐子さんに何か言われたのかい」

「いえ、僕が失礼なこと言つてしまつて」

「あんたがかい、そりや珍しいことだな」

「服部さんは僕のことどう話しているのですか」

「あんたのことは病気を抱えてよく頑張つていると伝えてある」

「僕はまた学校へ行つている小さな子だとばかり思つていたから」

「そうか、それで面喰らつているのか」

「慎一はこれではつきりと服部さんは名古屋の教会から自分のことを知らされていることを」

確信した。更に京都へ行ったこともおそらく知らされているのだろうと考えたがその事を話す気にはならなかった。

「是非、桐子さんのこと教えて下さい」

そう聞くと服部さんはお茶を飲みながら掻い摘まんで経歴を話しだした。

「桐子さんはなあ、戦争中学徒動員で毎日紡績工場で落下傘を作らされていたんや。しかし負け戦が続くと今度は特に選ばれて風船爆弾を作ることになってなあ、それで敗戦や。やっと家に戻れても今度は京都の繊維工場の跡継ぎに望まれて嫁に行かされた。この街は教会員なら誰でも法被を着るからね、その法被を縫製して全国の教会支部が集まっている此処で注文を取れば一挙に大量受注されるってわけや、御陰で店は繁盛して桐子様々と言われた。ところが良いことばかりが続かないのが世間の常でね、一年もしないうちに桐子さんが病気になるってしもたんや、学徒動員の疲労が響いたんだねえ。そうしたら婿が余所に子供を作ってしまったってわけや、桐子さんはきっぱり離縁して戻って来たっちゆうわけや」

「そうだったんですか」

「桐子さんの青春はなあ、日本の戦争の歴史とピッタリ重なり合うんや」

「そうですね」

「あんただって戦後の食糧難が原因で病気になるたんやろ」

「はい」

「それがこうして此処で勉強してられる程になったやないか」

「ええ」

「その不思議なあんたの功德をなあ」

「はあ」

「是非桐子さんにも分けて欲しいんや」

「でも僕なんかにそんな力はありませんよ」

「なんで」

「僕なんて何処にでもいる貧乏人の息子に過ぎないでしょ」

「阿呆、その何処にでもいる小倅が病院にも行かんとちゃんと元気になったやないか」

「そりやそうですね」

「それが教会の力やないか」

「はい」

「あんたの病氣回復は奇跡と言っても良い位功德の高いもんなんや」

「そうですね」

「当たり前前じゃ、あんたが来たばっかしの時にな、夕食後の経典講義に昼間の疲れで寝てばっかしおったそうや」

「そうですね」

「若奥様が心配して便所掃除止めさそうと相談したんや」

「はあ、そうですね」

「そんな時教会長がここが勝負時や、そのままにしとぎって言われたそうや」
「そうだったんですか」
「そしたらあんたもよう頑張つて一年も皆勤したそうやないか」
「僕はただ意地でしたたまで」
「それを見届けて教会長が奈良へ行かしてみろ、と言われたそうや」
「そうだったんですか」
「こちらではあんたは有名なんやで」
「どうして」
「普通勉強を積んで奈良へ行かせて貰えるのにあんたは便所掃除で奈良へ来れたから便所小僧って有名なんじや」
「そうだったんですか、知らなかった」
「それを掴み取るのが信仰やないか」
「そうでしたね」
「当たり前や、それをうまく人様に伝えられるか否かが教導師の勝負なんや」
「はい」
「それが君の仕事なんや」
「わかりました」

翌日、慎一は理髪店に行き頭を丸坊主にした。昔から男は謝罪をするときはそうやって片を付けることを慎一は映画で教えて貰った。

八

慎一の心に火が点いた。桐子さんの話が幾度も慎一の頭を巡った。今迄は請われて使命を果たそうと思つたが今はすすんで桐子さんの回復に手を貸すことに変わつていた。それと同病の親近感から痛みや悲しみが直に分かるので他人とは思えない親しさが湧いてきた。一度寮に戻り夕食を済ませると真つ直ぐ桐子さんの部屋に向かった。

外階段を登って力強くインターホンを鳴らした。「僕です」と言うはず「入って」と返つてきた。丸坊主をみると桐子さんは可笑しそうに笑った。

「服部さんから桐子さんのこと聞きました」
「あら、なんて」
「落下傘の話とか」
「それ女子挺身隊の話ね」
「僕も毎朝天皇陛下の御真影に手を合わせて学校に行きました」
「あら、あんたにもそんな経験あったんか」
「国民学校一年生で新潟県の親戚に学童疎開しました」
「へえそうやった。それにしても敗けるなんてね」
「東京に帰ったら米が買えなくて毎日トウモロコシの粉しか食べられなくて」
「そうやったわね戦後は」
「それで結核になつて父親は葉代を払う為に徹夜迄始めて」

「そうか大変やったね」

「仕方なく実家がある区役所に医療保護申請して療養所へ行きました」

「そうか」

「そのうち日本中病気が蔓延して薬では間に合わないから医療保護を受けている患者に限定して手術しろと言われたけど、外科の成功率が五割もなくてわね、自分が生き残る自信は無いし家へ帰れば父も共倒れになってしまおうし」

「ほな、どうしたん」

「名古屋の天道教支部へ逃げたんです」

「へえ、それで病気は」

「毎朝四時から教会の便所掃除と山を削る作業を一年間やったらよくなってきて」

「一年も」

「一年も」

「うっそを」

「ほんとです。とても不思議」

「医者にもかからんと、そんなことってあるんや」

「だから桐子さんにもその不思議が伝わるように」

「嘘であつても嬉しいわ」

桐子さんは慎一をまじまじと見つめてポツンと言った。

「私達って世間から見ればはぐれ者もいいところね」

「えっ」

「みんな一生懸命働いているちゅうのに」

「仕方ないですよ」

「生きてるのになんの役にも立たへん」

桐子さんは口をつぐむと下をむいた。

慎一はそれを見て思わず強い愛情に変わった。

桐子さんは耐えきれず

「とつても寂しいわ」

と涙ぐんだ。桐子さんは自分の病気は簡単には治らないことを話した。

慎一はジツト聞いていた。

桐子さんの施薬の内容を聞いてみた。薬は慎一も知っている薬の他にも服用していて、その服用量の多さに内心驚いた。だがその事は黙っていた。桐子さんの病状の重さに今更ながら衝撃を受けていた。これでは健康な臓器への副作用は計り知れないだろうと思った。やがて桐子さんは

「今度の日曜日私と一緒に奈良にいかへん」

少し笑顔が戻ったようだった。

その日は秋の爽やかな冷気が慎一の頬を撫でて過ぎた。

丹波市の駅から約束通り奈良行きの一両目に乗った。桐子さんは既に窓際に乗っていた。初めて見るスーツ姿だった。隣に座わると微かに香水の匂いが鼻をくすぐった。眉の下に薄くシャドーが塗られ唇には紅を差していた。藪長けた女性の姿に慎一は圧倒されていた。

電車が動き出しても桐子さんは外を見たまま黙っていた。

やっとアナウンスの「まもなく終点の奈良です」と聞こえると

「修行中のあなたを連れ出してええんかしら」

「いいんです。大丈夫です。全然構いませんから」

桐子さんは笑った。それを見て慎一はやっと安堵した。たとえ修行中でも服部さんからなんと叱られてももう慎一は自分の心の命ずるままに生きるよと決めた。それでも修行は決して疎かにはしないと誓った。

奈良から関西本線の加茂行きに乗った。

「こんな病気になった御陰で私の心は終戦で止まってしまったの」

「どうしてですか？」

「それ以上聞かんといて」

桐子さんは寂しそうに流れる風景を見ていた。慎一は身もだえしたくなるのをこらえていた。自分だって絶望的な状況からこうして元気になったのだからきつと桐子さんだって希望はある筈だ。そう伝えなかったけれど言葉で表現できなかった。ぎゅっと抱きしめて気持ちを伝えたいけど拳を握って耐えていた。

加茂駅に着くと鄙びた広場に旧式なバスが止まっていた。桐子さんは迷わずバスに乗り込んだ。慎一も慌てて従った。なだらかな奈良の山野が何処までも広がっていた。バスは起伏のある山道をユックリと進んだ。やがて寺前の停留所で桐子さんは降りると慎一を小道へ連れて行った。小道は万葉の往時が蘇るかのように侘びた景色が続いていてそこに石仏が葉陰に隠れていた。仏様は微笑んでいた。誰が手向けたのか鮮やかな切り花が添えられていた。

「私はこの風景が好きなの」

と桐子さんが言った。心安まる眺めだった。やがて浄瑠璃寺の山門に入った。少し歩くと全景が広がっていた。慎一は思わず叫んだ。

「まるで浄土みたいだ」

二人は立ち止まって見入った。慎一も息をのんで見続けた。池の向こうに小さな三重の塔

が少し傾いているかのように建っていた。その姿が浄土信仰をそのまま映していた。二人は近づくとも自然と頭が下がった。朱色に塗られた木組みもよく見ると匠の振るった削り跡がそのままの素朴さだった。平安の信仰がいまだに息づいていた。池を巡って本堂に入ったら等身代の阿弥陀様がずらっと並んでいた。

二人のほか誰も居なかった。仄暗い堂内に麝香の香りが満ちていた。格子越しに池と三重の塔が見え時代が自然と昔に遡った。

慎一は思わずしがみつくように桐子さんに抱きついた。桐子さんは抗った。細い折れるような身体だった。慎一もどうしようもなくしがみついたまま体が固まってしまった。桐子さんが動けなくなった。慎一は抱き締めたまま唇が合わさった。

長い時間が流れた。

突然、桐子さんが膝から崩れて足元に蹲った。驚いた慎一は急いで桐子さんの身体を床に横たえた。息遣いが荒く顔色が真っ青だった。狼狽えた慎一は救急車を呼ばなければ、と思った時桐子さんの左手が慎一のジャンパーを掴み右手で拝む仕草をしながら「このままにして」というような動作をした。慎一は桐子さんの頭の下にバッグを差し込み様子を窺った。暫くして徐々に顔色が蘇ってきた。

桐子さんは静かに立ち上がった。

「ゴメンナサイ」

慎一はしっかりと桐子さんを抱きかかえ

「僕がきつと治してみせます」

と言った。桐子さんは微かに頷いたように見えた。慎一は念を押すように

「きつとです」

「わかったから」

桐子さんはようやく歩き出し、それでも丹念に阿弥陀仏を一体づつ観て回った。慎一は思いがけない桐子さんの様子に動転していた。なんとか自分の気持ちを伝えたかったけれどそれ以上言葉が見つからなかった。桐子さんは寺を出るとき立ち止まってもう一度振り返った。

「来てよかったわ」

慎一はそれを聞いてやっと安堵した。

桐子さんを守りたいと思っただけど自分には何の力もないことが情けなかった。何もしてあげられないことが歯がゆくてならなかった。

二人は自然と小道の方へそろそろと歩いて行った。なだらかな道の両側には照葉樹林が続いていた。林の中ほどに陽が差し入って葉叢の陰に柔らかな芝草が広がっていた。

桐子さんの額に汗が浮かんでいた。

「少し休みましょう」

慎一は手を添えて芝草の上に桐子さんを座らせ自分もその横に座った。密やかに風が吹き通って二人の頬を撫でた。

「あなた病気移るわよ」

「大丈夫です」

「どうして」

「桐子さんが病原菌を排出していたら自宅療養も出来ないし第一隔離されるでしょう」

「さすが同病者ね」

「僕もそんな人をたくさん見えていますから」

「そうなんや」

桐子さんは伸びをするように背中を芝草に投げた。慎一も真似をした。

「お互い厄介な病気になったもんね」

「同感です」

「病んで残った排気量の限界でしか生きていけないなんて」

「そうです」

「全く歯がゆいったらないわ」

二人は空を見た。

樹林の先に鈍い午後の光が茜色に染まっていた。

「私はねえ、超一になりたかったの」
「えっ」

「一遍上人についてゆく尼さん」

「一遍上人？」

「私はそんな人を探していたのに」

「すいません」

「いいのよ、世の中って少しも想うようにいかへんのやから」

二人は帰路についた。

翌日図書館へ行って一遍を調べた。十歳で母を失い出家してから全国を行脚して踊り念仏で民衆を鼓舞した聖であった。一遍には超一という尼僧とその子がいつも一緒だった。そんな偉人であることに慎一は恐れ入った。

それと同時に桐子さんの病状は思いのほか深刻であることに気が滅入ってしまった。なんとか助かる道はないか慎一は考えた。

それからなんでも逢った。

その度に恋しさが募った。頭の中は桐子さんで一杯だった。けれどどうしても卒業して免状を名古屋の若奥さんに見せなければならぬと思っていた。それがせめてもの教会への恩返しと思っていた。免状があると全国の教会の祭壇に登って祭事をする資格と祈禱を施す資格が得られた。しかし今の自分は桐子さんだけだった。

学館へは毎日皆と一緒に通学していたが夢遊病者のように移動していただけだった。これから先どうしたらいいのかさえ見当が付かなかった。

木枯らしが吹いて枯れ葉が通学路に舞い散る頃になって突然桐子さんとの連絡が付かなくなった。心が半狂乱になって何度も直通階段を登ってインターホンを鳴らすのだが返事はなかった。神様にも祈った。早朝参拝の他に毎夜食事が済むと神殿へ行って祈った。

或る日、同室の二人が歩いてきた。「急にどうしたの」と尋ねると今度は前を塞いで「ついてきな」と言った。街の裏手是水田が広がっていた。街灯もなく真つ暗な道でその横には水田へ水を引く水路が走っていた。

急にその水路に突き落とされた。水嵩は膝程の水位で激しく流れていた。そこを歩かされた。木村さんが

「お前一番若いくせに何してんのや」

近藤さんは

「教会付の教導師見習いが夜になると何処ほつき歩いてんのや」

二人は同級生から聞かされたと子細を執拗に尋ねた。教会からの依頼だと伝えるとやっと水路から上がることを許されたがそのかわり暮れに一人ずつ全校生徒の前で読み上げる「自分を語る」原稿を二人分書けと約束させられた。膝下のすりむいた傷がヒリヒリと痛んだ。

農場の服部さんにはとても会うことは出来なかった。罪悪感が身を責めたが慎一は人間として胸を張っていたかった。

ますます桐子さんの寂しげな顔が胸に迫って眠れなくなった。

とうとう我慢が出来なくて神具店の左側の玄関から会いに行った。お母さんはあっさりと通してくれた。

「大変だったのよ。救急車を呼んだりして」

お母さんは子細を聞かされていないことが分かり安堵した。

部屋に通ると桐子さんはベッドに寝ていた。頬がこけていた。

慎一は胸が熱くなったが何も言えなかった。桐子さんは起き上がろうとした。

慎一は駆け寄って助け起こした。その手が自然と胸に触れた。胸は手のひらに隠れるほど

優しかった。その大きさがたまらなく好きだった。何時までもそうしていたかった。

「あんたに連絡つかんかった。駄目やわ」

「ごめんなさい。僕だつて気が狂いそうだった」

連絡がつかなかった桐子さんは急に呼吸不全になり容体が急変した。

慎一は情けなかった。桐子さんの一大事に何もしてあげられない。無力感が襲った。

桐子さんが安心してくれるような方法がないか考えたけれど良い案は浮かばなかった。馬鹿でどうしようもないと頭を殴り続けた。

「僕は一生桐子さんの側にいます」

感極まつてそれだけを伝えた。

桐子さんは目を見開いてそれを聞いていたが

「ウフフ、無理せんでもええよ」

「いや、絶対やります」

「その前にすることがあるでしょ」

「なにを？」

「卒業したら名古屋への報告があるでしょ、それが済んだら東京へ帰りなさい」

「えっ」

「あなたの家族はあんたを必要としてる」

「それなら桐子さんも一緒に」

「私？」

「ええ」

「私のはぐれ者やから」

「僕だつて同じじゃないですか」

「無理よ」

「僕だつていつまでも子供じゃありません」

「あああ、ああ、もう一度」

「もう一度、なんですか」

「この身体が悔しいわ」

桐子さんは寂しく笑うと天井を見上げた。

十

穏やかな日々が続いた。と言つても桐子さんの病状が好転したわけではなかった。桐子さんの病名は粟粒結核と言つて肺の全面に粟のように病原菌がはびこり、一方が回復すると他方が浸潤してなかなか全面的回復が覚束ない難病であった。治癒するのに長期の投薬と精神の強さが求められた。

慎一も規則通り通学を続け夜になると神殿に行って祈りを捧げた後、毎日桐子さんの部屋に通った。母親は天道教の信者なのでそのことを理解してくれたが本人は決して天道教の話はしなかった。丁度病氣以前の慎一に似ていた。そのかわり桐子さんは絵画が好きでよく画集を集めていた。

ある時、雪舟の絵を見せて

「これ位の覚悟がなければ信仰は無理ね」

見ると壁に向かって目を見開いている達磨に自らの切り落とした左手を差し出して入門を請うている慧可断臂図であった。

「面壁の達磨はなかなか入門を許さへん。遂に慧可は自らの手を切って差しだしやっと入門を許されたのよ。私に構っているようでは駄目。東京に帰りなさい」

慎一は目を見開いてその絵を見続けた。慧可の目には涙が光っているように見えた。

荘厳厳粛な絵であった。慎一の心を見透かしているようだった。

「僕は宗教家になるより在家の信者として生きる積もりです」

慎一の心は乱れていた。どうして良いか分からなかった。唯一、桐子さんといると安心していた。このままずっと続いてくれると一番いいと慎一は想った。残念ながら信仰よりも桐子さんだけだった。心は破戒坊主の成れの果てだった。それでも無残とは思わなかった。ただ桐子さんの病氣が治ってくればそれでもいいと思った。少しも澄んだ境地は得られなかった。木曜の本殿清掃には長い回廊の板を乾いた布で汗が飛び散るほど磨き込んだ。板は厚さ拾糶を越えて五十糶以上も続いていて薄暗がりの中に光っていた。

慎一は教祖の口伝をまとめた「御筆先」と称する秘儀を名古屋にいた時から繰り返し口誦していた。教祖の脳裏に降臨する天上の声を教祖がまとめた口伝書である。そこには道元のような難解な文章は一つもなく人間の律すべき行動の諸範を記しているので平易であっても行動することは非常に難儀であることになりはなかった。

決めたことは直ちに実行する。ただそうやって此処まで来たらいつのまにか慎一の身体から病氣が失せていた。その不思議な縁に慎一は戸惑っていた。どうすべきであるのか。桐子さんと同じ病状の人を慎一は千葉の療養所で既に知っていた。その人は隔離病棟から遂に大部屋に戻ることは出来なかった。

そうした患者はどうすれば良いのか。むしろ安らぐ束の間があるならば人間らしく生きること否定されるべきではないと思った。慎一は同時に自分と同じ境遇の医療保護を受けている療養所の同病者を思った。彼等は今でも成功率の僅かな手術を迫られて気が狂う程の懊悩を繰り返していることだろう。早く社会に帰還しなければならぬ事情を抱えている人達は考える時間すら無くて手術を選択し二人に一人は霊安室に運ばれていった。その遺体を運ぶ運搬車は食事を運ぶ厨房車と重量がまるで違うので車輪の音が木造の廊下を滑る音はあまりにも軽く寄る辺なくはかなげだった。その音をたまたま静臥時間に聞いて

しまう時は廊下が余りにも長いので思わず廊下を切り落としたくなるのだった。その音が毎日休むことなく続くのでそれだけで気が狂いそうになるのだった。慎一はその地獄のような悪夢をこうして様々な僥倖によって避けることが出来たがその事実だって何の確証もなく慎一は今でも再発の恐怖を隣り合わせに抱いて生きていることに変わりは無かった。だから桐子さんとの巡り合わせにはただ神にすがりつきたい程の切なさを慎一は抱いていた。桐子さんがいなくては生きてゆけない。その不安が桐子さんを思う時いつもまざまざと蘇ってきた。桐子さんを置いて東京に帰るなど到底出来なかった。

次の日も桐子さんの部屋を訪ねた。

桐子さんは学寮の夕食を食わずに来たことを察すると隣の炊事場で包丁の音が聞こえた。暫くすると簡単な食事を作ってくれた。学寮の食事とは雲泥の差があった。卵焼きでも違う味がした。御飯は何もなくても食べられる程旨かった。修行を忘れてしまう程幸福な気持ちになった。満腹が濃密な雰囲気醸し出した。それでも桐子さんは「東京へ帰えりなさい」とこの日も呟いた。その言葉に慎一の心に火が点いた。

ベッドに飛び乗った。だが桐子さんを押さえつけるとゆるやかに桐子さんを抱いた。激情は走ったが桐子さんの発作が起きないように両手で二人の間に空間を作った。

「一人では絶対に東京へは帰らない」

興奮して叫ぶと二人は息を整えるまで見つめ合った。長い沈黙の後桐子さんはゆっくりとベッドから起き上がり

「そないなこと出来へん」

「自分を見習えば貴女だって」

「わてなんて到底無理」

「無理が通ればそれこそ自由でしょ」

「わての病気はそれ程甘もうないんや」

「じゃどうしてほしいんですか」

「わてから言うことやない」

「じゃ治らなくてもいいんですか」

いきなり慎一は平手打ちを受けた。

「阿呆。宗教なんて人間の願望にすぎんやないの」

その言葉を聞いて慎一は急に元気だった頃に母親をよく訪ねてくる定婆さんを思い出していた。あの頃慎一は定婆さんを正直嫌っていた。世間知らずの母親に目先の利益をちらつかせて宗教に引きずり込むペテン師と思っていた。宗教では世界を救えない、そう堅く慎一は考えていた。その理屈しか信じない慎一が突然病気に襲われた。その時理屈だけでは解決できない現実には悩んだ慎一が藁をも継る思いで飛びついたので定婆さんだった。理屈の破綻の先に宗教が現れその宗教が新しい道を開いてくれた。これは慎一の合理では測れ

ない道だった。慎一は今合理と非合理の狭間で立ち往生していた。いつそ信仰に絡め取られた身ならばもう一度信仰によって奇跡を呼び起こして貰いたい。そんな思いで慎一は桐子さんの回復を神に願い出た。

十一

翌日から学寮と教室を往復しながら神が聞き届けてくれることを願った。ただ金曜日の農場へは行けなかった。その時だけ中学校を抜け乗鞍古墳まで行き池の周りを当てもなく歩いては帰ってきた。頭の中は桐子さんで一杯だった。

その服部さんが学寮にやって来て手紙を置いていった。担当者からそれを受け取った時とうとう来るものが来たと思っただけだった。文面には「何時でも良いから農場へ寄ってくれ」とそれだけだった。言われれば逃げるわけにはいかなかった。

服部さんは珍しく算盤を弾きながら帳簿を付けていた。

「この間、桐子さんのお母さんが来やはった」

お母さんと聞いて慎一はドキリとした。服部さんの次の言葉を待った。

「あんたにもう桐子には会うてくれるな、と言われた」

「そんな」

「桐子の身体に良いことはちっともないて」

服部さんの言葉に慎一は絶句した。

「あんたを薦めたのは私やからね」

思わず慎一は叫んだ。

「待つて下さい。僕あの人と結婚させて下さい」

「何言うてんのや、あの人には病気なんやで」

「昔あの人と同じ病状の人をよく知っているんです」

「尚更おかしいじゃないか」

「あの人の病状は現代の医学でも治せないんです」

「えっ、そうなのかい」

「だから側にいてやりたいんです」

「変な理屈やないかい」

「治せないなら一緒に生きるしかないでしょ」

「それなら医者の方が適任やろ」

「違います。医学は対象療法にすぎません。あの人の方が大事でしょ」

「えっ」

「服部さんからお母さんに言うて下さい。僕が此処で治ったように桐子さんを治します」

「そんなことお母さんが承知するわけないやろ」

「桐子さんを僕の信仰で治せないなら僕は只の偽者じゃないですか」

「まあ待て。これ位で宗教を試さんでくれよな」

話は膠着状態となり服部さんの預かりとなつて二人は別れた。秋になつて講堂で学生一人一人の「自分を語る」授業が全学生の前で披露された。木村さんと近藤さんは慎一の書いた原稿をつかえながら読み上げた。慎一は信仰と不治の病との相克を真剣に訴えた。学生の間から熱の籠もつた反応があつた。

十二月になつて殆どの学校は冬休みになるのにこの学校に冬休みはなかつた。慎一は服部さんからの連絡もなく、と言つて奈良や京都にも行けず、ましてや桐子さんを訪ねるのも憚られた。ジットしていられなくて市内の石上神宮や夜都岐神社や柳本まで足を伸ばして黒塚古墳や長岳寺、崇神天皇陵などを見て回つた。部屋には同室の者がいるので慎一は神殿に行つて仄暗い隅に座つて蠟燭の灯の揺らめきを眺めて時を費やした。参拝者は途切れることなくやってくるが、それらを遠景にしてかすかなざわめきと室内の暖かさが安心と安らぎを慎一に与えてくれた。それが救いだった。

そんな或る日神具店の小僧さんが一通の手紙を学寮に届けてくれた。差出人は桐子さんからだった。文面は「今度の土曜日十一時三十分発奈良行き一両目で待つ」
駅は丹波市駅に決まつていた。前の時の列車と同じだった。

慎一に元気が戻つた。自分が此処で学んでいる以上この道を歩むほかない。その先は神が決めてくれるだろう。慎一がこうしていられるのは正にこの信仰の御陰だとするならばこの先も指し示してくれる筈だ。そう信じる他はない。

土曜日、列車には桐子さんが既に座つていた。慎一は黙つて隣に座わると左手で桐子さんの右手を握つた。桐子さんは前より痩せていてそれが気がかりだった。結局何も話さないまま奈良に着いた。

駅を下りると桐子さんは迷わずタクシーに乗つた。

「国立奈良病院と高等学校の前を通過つて蕎麦屋の観で停めて」

運転手は心得た感じですぐ発車した。広い通りには新聞社や電力会社の大きなビルが建つていた。程なくして運転手が

「病院と高等学校が右手に見えますよ、停めますか」

「そのまま行つて」

やがて右手に巨大な病院と樹々に囲まれた古びた高等学校が見えた。速度を下げてゆっくりとその前を通り過ぎると次の十字路を左に切つた。ほどなく「観」と書かれた蕎麦屋の前で車は止まつた。

白地に大きく「観」と書かれた旗のような垂れ物が下がった重厚な白壁の店だった。

桐子さんは鴨南蛮を頼み慎一には天井を注文した。天井は頬が落ちるほど旨かつた。

「学校時代時々来たの、懐かしいわ」

「さっきの学校桐子さんの」

「そう、友達の顔が浮かぶわ。結局一年しか通えなかった。」

「どうして」

「戦争よ」

桐子さんは未練を断ち切るように店を出た。

目の前は広大な奈良公園が広がっていた。二人は鷺池の畔に出ると中之島を通り橋を渡って浮御堂に座った。春ならば満開の桜が今は葉を落として霜枯れた静かな風景が広がっていた。慎一は物珍しげに辺りを見渡した。突然、桐子さんが驚いたように声をあげた。

「わああ、きれいな手えしてはるんやね」

名古屋で毎日山を削って土地を均していた手は決してキレイと言われるような手ではなかった。桐子さんは黙って自分の両手を差し出した。一瞬見間違ったかと思ってもう一度シツカリと見つめて驚いた。桐子さんの両手には掌紋がなかった。烏賊の肌のようにツルツルしているが所々自然とは思えないへこみが深く刻まれていた。決して重労働で鍛えられた手とは別段の痛ましい労役の痕跡がまざまざと残っていた。

「ひどいですね」

「私の青春」

「どうしたんですか」

「どうしたわけかあなたに聞いてほしいと思ったのや」

桐子さんは話し出した。

「女学校から突然学徒動員で大阪の紡績工場へ連れて行かれたんや。昼夜交替で落下傘の縫製をやらされとった。毎朝寮から隊列を組んで「鬼畜米英」を唱和しながら工場のミシンを歩み続けたのに昭和十九年十月十五日に突然作業が中止になった。一同は「キット動員解除になって家に帰れる」と期待しとったのに十月二十五日全員食堂に集められて担当士官が十名単位で三組三十人の氏名を読み上げ私もその中におったんや。士官から一人ずつ胸につける胸章を渡された。突然呼ばれなかった生徒が騒ぎ出した。胸章には桜の花びらがあしらわれてとてもキレイだったから皆も単純に欲しがっただけやった」

担当士官が大声を張り上げた。

「静かに、これは重要使命の動員である。御国に尽くすべき仕事は次々とあるんだ」

一同は既に声を失っていた。

「一旦帰宅を許されて改めて出発と思っと思ったら翌日軍用トラックで駅まで運ばれた。列車の窓は全て遮蔽されていて私達が乗り込むとすぐ列車は動き出した。薄暗い照明の下で顔を見合わせて緊張に耐えとったわ、大きな鉄橋を三つ、四つ渡ったので東へ向かったのかと想像したけど列車は二時間ほど走り詰めで止まった。下りてみると名古屋駅やった。やはり東へ向かったのだ。今度は私鉄に乗り換えた。ふと列車の横腹に「緊急」と書かれた札を見て皆は顔を見合わせた。声にならない緊張が走ったわ。士官は無言で携帯画板に書き込みをしとった。今度は二十分足らずで着いた。軍用トラックが待っていて車は大きな工場群を抜けると奥まった一面に止まったの。迷彩色を施した工場の隣にある木造建屋に入ったら食堂だった。名々の前におむすびが置かれて遅い昼食を食べたわ」

鷺池の畔に出るとさすがに十二月の風は冷たく落葉した樹々の枝をならした。二人は博物館を抜け依水園に入った。水心亭で暖をとり茶を啜った。冷えた身体に茶の温かさが心をも潤した。

桐子さんがほっこりと笑った。

「どうしたんですか」

「こんな話をしているのにとっても身体の調子がええの」

「そういえばいつもより顔色が良いですよ」

「どうしてもこの話をしたかったからかな」

「そうですか」

「あんたは縁故疎開だからこんな話は想像もつかへんわね」

「ええ、女性も働いていたなんてビックリです」

「男性が戦争に取られてしもうたから内地の銀行員や床屋、車掌は皆な女性だったんよ」

「女学生までもですか」

「日本中根こそぎ戦争だった。女子も挺身隊として軍需工場に配属されたわ」

「こつちも戦争に負けてからずっとお腹が空きっぱなしですよ」

「そんな人にこの話をどうしてもしておきたいんや」

桐子さんは話の続きを始めた。

「名古屋に着いた翌日全員食堂に集められて報道映画を見せられたの。驚いたことに此処へは私達の他全国から三百名も集められていたのよ。神風特別攻撃隊の出撃場面だったわ。関行男大尉が水杯を交わして飛んでいった。続いて十人も行ったのに一人も帰ってこなかった。「海ゆかば」が流れると皆な声を出して泣いたわ。これじゃ落下傘なんているわけないと思った。それが今度は風船爆弾になったの。とにかく日本は切羽詰まっとったんやね。でも神風を見せられて私達だって御国のために命を投げ出す覚悟やった。そうは言っても力仕事だし身体中泥だらけで一日中へとへとになって精も根も尽きてしもうた。風船の材料は楮という樹の皮から和紙にするんだけどこれが全国から列車で届くのよ。その和紙を糊で何枚も貼り重ねなきや水素が漏れてしまうから命懸けだった。とても辛かった」

そこで桐子さんはお茶を啜った。思い出すのが辛いのか暫く庭園を眺めていた。

「最初は糊づくりだったわ。午前三時に全員整理して工場に行くとき大きな水槽に蒔蒔の粉と水を混ぜて攪拌するのよ。その内粘つてきて棒に余程力を入れんと動かなくなつてきてね。腕がもげそうになるんやけどとにかく神風を見せられるから泣き言が言えんしね。その上、薬品も使うから手がツルツルになって穴が空くかと思うほど痛くなつてくるんよ。それでも神風がいたから我慢するしかなかったわ。一日中水浸しだったから痛い程身体に堪えたわ。これで肺をやられてしまったのね」

「本当ですね、しかも本土空襲もあるから休むわけにはゆかないし」

「そうやね、とにかくアメリカ迄飛ばすには冬の偏西風に載せなければ届かへんから軍だつて必死で追い込むんや、全く辛かったわ」

私達はお茶と饅頭を追加して身体を温めた。

「いよいよ風船作りよ。直径十メートルもあるから何しろ和紙が大きくてね。上下に分けて最後につなぎ合わせるとして始めは張り板を使ったけど能率が悪い上に河原まで持つて行く手間ですれだけでヘトヘトになってしまつてね。左手で和紙を押さえながら右手で次々と糊を塗つて行くので足元に糊が落ちるのを構う暇もないから靴下や靴が糊まみれになつて足が動けなくなつてしまうのよ、最後は皆な裸足やつたわ。傍で見たら滑稽だけど特攻隊に続けと髪振り乱して作業に没頭しとつた。今考えると本当に何故か悔しい気がするんよ。つくづく戦争なんて何故やつたか分からん」

「女学生が勉強もしないで女子挺身隊なんてどこか哀しいですね」

「それが戦争の実態ね。その上病気になつてしまつて全く生きる意味なんて何もない」

二人はしつかり見つめ合った。

十二

それが桐子さんとの最後の別れとなつた。

葬儀には全て末席に座つて見届けた。一通り終わるとやつと一人きりになり桐子さんと向き合えた気がした。夜には神殿に行つて仄暗い闇の中に身を沈めた。

次の日も慎一は神殿に通つた。片隅に座つてこの世に桐子さんが居ないことは絶対の事実と知つた。人間は死ねばもう終わりなんだ。この信仰は死んでもまた生まれ変わる「世直り」の思想が「御筆先」に書かれている。それがこの宗教の希望だった。

しかし死んだら全てが終わりであることが今それだけが慎一を捉えて放さなかつた。

「生も一時のくらいなり」禅宗の坊主の言葉が頭から離れなかつた。

慎一は当てもなく街へ出た。はずれの庇の傾いた店先に狸の置物がある古道具屋に入った。棗ほどの大きさの茶入れが目についた。手垢にまみれた紐付きの箱もついていたが残念なのは縁が欠けていた。その分値段が安かつた。慎一は思案の上それを買ひ求めて気が持が落ち着いた。急いで寮に帰ると火葬場で分けて貰つた桐子さんの骨を押し入れから取り出すとその茶入れに収めた。それを抱いて神殿に向かつた。これでやつと気持ちの整理が

ついた。神殿は香が炊き込められ位置に座ると慎一は瞑目した。

桐子さんの居ないことが身にしみて寂しく泣きたかった。

生きることはきつと泣きながら歩いてゆく他ないのだと思った。

桐子さんの生涯は国家とそして家への忠誠によって二十才に届かず骨になってしまった。人は自ら望んだ生き方を自分の意志によって自由に生きられる世の中にしなければならぬ。桐子さんの希望はそこにしかない。

慎一はその希望をたとえ困難であろうとも受け継がなければならないと思った。

その為にはまず自分の人生の構築をしなければならぬ。行く手は厳しく果てしない。それでも前に進まなければ桐子さんの無念を晴らすことは出来ないと考えた。

三月になった。全員が卒業の免状を貰った。木村さんは結局氷室業を廃業しガソリンスタンドに勤めることになった。商売を駆逐された相手企業に就職するなんて如何にも皮肉だがそれが生きることなんだと慎一は深刻に頭に刻んだ。近藤さんは美容学校に復学し父との生活は断念し母の美容室に勤めることになりそうだ。

義務教育と違って皆はそれぞれの予定に従ってさっぱりと別れていった。慎一ひとりが感傷的になっていた。決意はしていても当面の進路を決められなかった。はつきりしていることは卒業のお礼に名古屋の教会に行かねばならないことだけだった。当然名古屋の若教会長からは教会に勤めて信仰の道にそのまま続けてゆくことを命ぜられることは分かっていた。明日をも知れない病気の身がまがりなりにも世間に出て働ける身体になったのだから当然と言えば当たり前かもしれない。しかし慎一には信仰と言う神聖な職業に自分が本当に相応しいのか疑っていた。桐子さんを生かすことが出来なかった以上失格と想っていた。しかし桐子さんが生きていれば逆に信仰の道を捨てねばならないとも考えていたわけだから、そんな自堕落な精神では修道者の風上にもおけない外道と言われても仕方の無い現状だった。桐子さんが生きる道筋の中心であった。その人を失っては糸の切れた凧と同じだった。

心の片隅から離れないのはやはり桐子さんだった。この街で起きた思いがけない出来事から離れたくなかった。その後一回も鮫島家へは訪ねて行けなかった。桐子さんがいなくては繋ぐ糸がなかった。けれども丹波市の駅や奈良の街が脳裏に浮かぶと、とてもこの土地を離れたくないと思ってしまうのだった。

卒業したのではや信徒学館には住めなくなつたので服部場長に頼み込んでもう少し農業に従事しながら信仰の道を究めたいと相談した。場長は近くの天道教博物館に教祖の資料があるから「お筆先」を研究してみろと助言をしてくれた。早速慎一は荷物をまとめると農場の信徒室の一部屋に引っ越した。服部さんには恥ずかしい数々の場面で助けて貰っていたがらごとく修業の道に反していることが心苦しかった。それでも服部さんはその嘘を常に見極めているのに最後には慎一を許してくれた。未熟者と言うのなら許せるだろうが慎一は確信的に神に背いている不信心者と変わらなかった。それでもその全てを許してなおかつそこに付けいつてくる慎一の悪逆を更に受け入れるのだから服部さんこそ真の修道者に相応しい人格者だった。そんな服部さんに報いるには慎一の人生を架けた今後の行動によって示してゆく以外にはないと慎一は覚悟した。

その為には服部さんから助言されたことと仕事だけは手を抜かずに励んだ。苗床に植え付ける種もみを温湯消毒してはその種を水温を測りながら水を調節して発芽を見届けた。

発芽を確認すると苗箱に土を入れ適度な間隔で種をまいた。そうした仕事は手を抜けないだけに夢中になれるのでその時だけ桐子さんを思い出さずに済んだ。そうやって時を過ごした。

十三

四月になった。宗教の街の朝はまた新しい生徒達が隊列を組んで教育学館へ吸い込まれていった。揃いの法被が鮮やかな紺色で街を染めた。慎一は毎朝通ってくる中島さんと田代さんに従って田んぼに入った。以前、牛がいたのに今は全て手作業だった。

名古屋の時は病気の再発を恐れて鍬やスコップを使うのに肝を冷やしたが今では鍬を振るうことが楽しかった。身体を使うことがこんなにも心弾むことに慎一は改めて名古屋時代の全てに感謝していた。お祖母さんの協会長夫人から初めて毎朝の便所掃除を命じられたことが懐かしく思い出された。

ひと通り田起こしが済んだ頃、中島さんが肥料を田に撒き始めた。田代さんも続き慎一もそれに従った。その後再び土を耕してゆくと田は鮮やかな黒色を増してゆき肥料はその中に混じり込んでいった。土は新しく蘇った。三人は畦道に座ると喉を鳴らして水を飲みほした。慎一は畦に身体を投げ出して空を見上げた。

四月の空はあくまでも高く蒼く果てしなく広がっていた。中島さんが大声で叫んだ。

「田に水を引くぞ」

三人は水の取り入れ口に急いだ。昨年、の稲刈りの時に閉めた止水口の堰は土に埋もれていた。中島さんがおもむろに鍬で周囲を掘り起こすと力を込めて堰を静かに引き上げた。堰が徐々にせり上がってゆくとその隙間から勢いよく水が田に浸みこんでいった。この頃が一番身体のきつい時期だった。慎一は食事が終わると炊事場で食器を洗いすぐ部屋に引きこもって身体を休めた。

朝は陽が昇らないうちに二人がやって来た。服部さんの奥さんが用意した食事を全員で黙々と口に運んだ。お茶を啜ると中島さんがまず立ち上がり長靴に履き替えると農機具を持って出かけていった。田んぼまでは二キロ程あった。田代さんが続き慎一は三人分の水を満杯にした薬缶を下げて続いた。田んぼに着くと三人はそれぞれの持ち場に行き水の張った田に鍬を入れた。土を掘り起こしては均し畦道までたどり着くと隣に移っては折り返し作業を続けた。田は起こされ次々と均されていった。陽が高くなる頃には田んぼに張った水が風に吹かれてさざ波が立った。遠くの山並みは霞がたなびきすっかり春の色に染まっていた。慎一はそうやって少しずつ桐子さんを失った悲しみを心の奥に閉じ込めていった。

十四

苗床に撒いた種が十糎程に伸び茎が二、三本に分かれ葉が立ってくるといよいよ田植えが始まった。慎一はすっかり心の奥にしまっていた病気への恐怖に対してやっと一つの覚悟をつけることが出来た気がした。人の命と言うものは自分で決められるものではない、ということがわかった。決められないとするならそのことでいちいち悩んでも仕方がない。誰

も命については何も決められないのだ。決められない内は自分の心に従えばいいと思った。この農場で働かせてもらっている間にそれがわかった。と同時にこういう生活もいいものだと思いはじめた。

心が楽しかった。それが人間にとって一番なのだと思った。

慎一は今日も三人と一緒に田植を始めた。種から芽生えた稲を三、四束ずつまとめると適度な間隔で田に植え付けていった。汗がしたり落ちた。それが気持ちよかった。慎一は同じ動作を繰り返しながら田に稲を植え続けていった。

その時、自転車を飛ばして服部さんが慎一を呼んでいる声を聞いた。慎一は立ち止まると何事か、と服部さんを見た。服部さんはただならぬ顔をして自転車を止めた。

「お父さんが倒れたそうだ」

慎一は家のことは全く頭から放念していた。

「父が倒れた」と聞いて動転してしまった。

服部さんが

「おいつ、シツカリしろ」

と言われて我に返った。どうしたらいいのか、考えが纏まらなかった。母親では家のことは対処出来ないだろうと思った。

「すぐ、帰りなさい」

服部さんから言われて慎一は田から上がった。

「自転車を使いな」

と言われそのまま自転車を走らせた。農場に着くと顔を洗い部屋に行くと学生服に着替えた。奥さんが経木に大きなおむすびを二つ包んで慎一の鞆に入れてくれた。

「車を盗まれたそうだ、二台共」

服部さんが追いつくと息を切らせながら事態をかいつまんで話してくれた。日本橋本町界隈の製薬会社から至急薬品を静岡の工場迄運搬を依頼され父親が「急ぎなら今から運ぶより真夜中に走らせた方が早く着きますよ」と進言したところ受け入れられ父親は社員と共に二台の車で本社まで行き昼間のうちに薬品を車に梱包し車庫に入れずに家の前の道路に待機させ夜中に起きたところ車が二台共消えていた。

父は折角お得意から託された信頼を裏切ってしまった、とすぐ警察に届けると同時に「謝罪」と「荷物の弁償」について本社まで出かけた。会社では「荷物については保険が効く」し、盗難は災難だから「お宅の責任では無い」と慰留されたが律儀な父は「自分の示しが

つかない」と倒れてしまい入院したとのことだった。

慎一は初めて家の一大事に直面し、自分の頭から「家」のことを放棄していたことに強い責任を感じ服部さんに「このまま帰宅したいので名古屋には寄れない」と伝えると

「その事は私から伝えるから」

と言ひ「これを持って行きなさい」と一万円を差し出した。慎一は躊躇ったが「いいから」と言われ「お借りします」と受け取り丹波市駅迄自転車を借りることにした。

「今からだと京都駅の夜行に間に合うから」と農場の全ての人に「別れ」の挨拶をすると自転車に飛び乗った。

京都発二十二時三十分発に間に合った。寝台列車に接続した普通列車だった。九割方埋まった客席の人達は一樣に黙りこくっていた。慎一は初めて家の将来について不安が募った。今まで自分の事については考えたが家については考えたことが無かった。

父は慎一が病気になった時治療費が払えないと徹夜の仕事を請け負って昼間の仕事を終えると休憩を取り十時にはダンプ車の運転手として当時盛んだった銀座界隈の建築工事に携わった。そのことを母から聞いた慎一は自ら区役所の保健課へ行つて自分の「医療保護」の相談に行った。その結果千葉県療養所に入所することが出来た。

初めて寡黙な父の姿が脳裏に浮かんで思わず「父を助けて下さい」と神にすがった。

十五

盗難から十日後二台の車は千葉県船橋の港で発見された。警察の見解では犯人の狙いは車では無く積載した薬品にあると目星をつけ製薬会社に聞き取りに行ったが犯人の目星は未だ不明だった。父は入院二日後には体力を回復し社員と共に車を引き取りに行った。

家は再び日常を取り戻したが今度は母が寝込んでしまった。それ程商売道具の盗難は零細企業にとって耐えがたい衝撃であった。

慎一は事態が落ち着くと名古屋の天道教の東京支部がある大崎に行き事情を説明して教学校卒業のお礼と服部場長への一万円の返金と幾ばくかの寄付を申し出た。勿論家から貰ったお金だが支部では「続けて支部で働きなさい」と言われた。

慎一は「家の手伝いをしなければ」と伝えると同時に月に一回の「祭事」には必ず出席すると伝えて帰宅した。

先のことには慎一には全く見当がつかなかった。これからゆっくりと考え将来に備えたいと旅先で使った鞆の整理を始めた。慎一は茶入れに入れた桐子さんの骨を仏壇の物入れの奥にしまった。父がいつも使っている経典が手に触った。何気なくそれを開いた。「正信偈」があり「阿弥陀経」があった。更に開くと「御文章」が出てきた。

「それ人間の浮生なる相を観ずるに朝には紅顔ありて夕には白骨となれる身なり」何気なく読んで慎一は経典を閉じた。「自分の一切は自分が一人で決める以外無い」

慎一は線香に火をつけ親鸞画像を睨みながら手を合わせると火が消えるまで座っていた。

完

令和五年十二月四日